

輪読形式の 大学院授業

遠藤 公嗣

(明治大学大学院経営学研究科教授)



経営学研究科の授業は1コマ100分ですが、講義科目とされていても、多くは演習形式で実施されます。演習形式も様々あると思いますが、私は課題書を輪読する形式をとっています。課題書としては、既存研究を踏まえて学術的に确实だが一般向けに執筆された書籍を、私が指定しています。こうした書籍は、実は、あまり多くありません。本年、春学期に私が指定した課題書の1つは、小熊英二『日本社会のしくみ』（2019年、講談社現代新書）です。

私は、昨年度までの対面授業では、下記のように実施しています。本年度春学期は、これを執筆しているのはZOOMによるオンライン授業期間中であって、必ずしも下記のとおりになっていません。

課題書の各章を各受講者に割り振ります。通常、1章が1回授業の範囲となります。受講者は、自分の担当章を輪読する授業日までに、担当章の要約を作成しコメントをつけます。要約は図示が望ましく、箇条書きは可と不可の中間で、文章での要約は不可です。文章での要約は、しばしば書き写しとなり、担当者が頭を使って理解することが不十分になるからです。

要約よりも重要なのは、コメントをつけることです。考え抜いて、なるべく長文コメントをつける必要があります。コメントをつけられない場合は「読みが浅い」「研究は未熟だ」と自覚すべきです。実際、修士1年生だと、十分につけられないことがあります。コメントのほか、関連事項や反対説などを追加し補充することはよいことです。このような準備に、担当者は徹夜に近い時間がかかることもあります。

以上が授業時の報告文となりますが、その全体でA4判4枚を標準の分量と考えてください。そのため、記述内容の取捨選択が必要で、それを考えることも必要です。以上の作業すべてが、実は、修士論文執筆の基礎となり、練習になります。修士論文執筆のためには、テーマに関連する先行研究を自分な

りに総括する必要がありますが、それに近いことをやっているからです。

担当者は、授業前に、デジタルでの報告文を他受講者へ配布します。授業当日は、他受講者がそれを印刷して持参します。印刷物へは書き込みが容易だからです。担当者は報告文を20～30分で口頭で説明します。他受講者も、予習として、課題書を読んで担当者と同様の作業をしておく必要があります。報告文を書かないだけが担当者との違いです。他受講者が予習をやっておくと、口頭説明の後に、他受講者は質問や意見を述べることができます。他受講者がこれをしていないと、述べることは容易でなくなります。

口頭説明の後、他受講者は担当者に質問や感想を述べ、担当者はこれに答えます。受講者全員がランダムな席順に質問や感想を述べることを、私の授業では通例としています。ときには受講者同士の議論になることもあります。このプロセスによって、課題書の内容の理解と、それについての自分の見解が、受講者それぞれに明確となります。これは、院生による自己確認のプロセスでもあります。

私は、上記プロセスが終わった後に、私のコメントを述べるだけが望ましいと思っています。その内容は、上記の議論についての、より広い視野ないし異なった視点からのコメントであったり、あるいは、議論に出てこなかった論点の指摘が望ましいでしょう。受講者は上記プロセスで自己確認ができているので、それを上回る理解は何かを理解しやすいはずで、上回る理解を自己のものとすることが容易なはずで、もちろん、私がこうしたコメントをどれほど十分にできるかは、私の研究力や教育力に左右されるので、私もまた研鑽を積みなければなりません。

Profile 明治大学大学院経営学研究科教授。1950年生まれ。東京大学経済学部卒業。経済学博士（東京大学）。専門は雇用関係の全般。近年の論文は「同一価値労働同一賃金」原則の定義とそれに特有な職務評価の手法：それらを「アメリカ製」となぜ呼べるのか、そして、それらは欧州諸国でなぜ普及しているのか？（『明治大学』経営論集』67巻1・2・3合併号（2020年）、1-19頁。近著に、単著『これからの賃金』（旬報社、2014年）、編著『同一価値労働同一賃金をめぐる職務評価』（旬報社、2013年）、共著『仕事と暮らしを取りもどす：社会正義のアメリカ』（岩波書店、2012年）、編著『個人加盟ユニオンと労働NPO』（ミネルヴァ書房、2012年）など。